

行事予定 (2012年)

- 11月29日(木) 第三回全国幹事会
(国立京都国際会館)
- 11月29日(木) 第41回日本臨床検査専門
医会総会・講演会
(国立京都国際会館)
- 12月21日(金) 第三回常任幹事会
(日本臨床検査専門医会
事務局)

巻頭言

日本臨床検査専門医会
全国幹事 大谷 慎一

臨床実習(ポリクリ)雑感

卒後4年目から、医学部5・6年生の臨床実習に携わってきた。今年で臨床実習20年目を迎えた。途中、約半年間ずつの2回の出向(派遣病院での勤務)はあったが、卒後4年目以降の全ての学年で、講義をしてきた事になります。臨床実習は、当初は2週間であったが、その後1週間に短縮された。最近では、5年生は変わらないが、6年生はクリニカルクラークシップの臨床実習が加わり、並行で進行する時期は大変忙しい所ではあります。

特に印象的な事は、20年に亘り採血実習を担当してきた事であります。採血手技を指導するのと同時に、各学生の血液検査結果も同時に測定して、臨床実習当日の夕方にコメントや指導を行いながら検査結果を渡すことをしております。丸一日に及ぶ臨床実習で学生と接し、検査結果も確認し、大部分は健常人のはずである医学生の生のデータを見てこられたことは、何より検査医としても、そして、臨床医としても貴重な経験となりました。血算、生化学、免疫血清、3年前からはHbA1cも加え、私自身の見立てを鍛えているところでもあります。やはり、継続は力なりである。昔は、鉄欠乏性貧血気味の女子や体育会系男子の運動負荷による生化学変化、体質性黄疸などが多かったと記憶しておりますが、近年では、脂肪肝気味の肝障害、脂質異常症、高尿酸血症など生活習慣病に関連する異常が多いと感じています。そして、ついには糖尿病まで見つけてしまいました。そのまま、緊急入院になりましたが、その後、無事に治療されて退院出来ました。毎年、学生にとっては、恐怖の一日でもあるようです。自分の体がまず第一であり、そこから考えてゆく事が重要であると考えています。学生時代に種を蒔き、研修医、病棟医、主治医と成長してゆく姿を見て行けると同時に、何か現場で起きても全ての診療科に調整に入る事が出来るのも、学生時代の臨床実習の一日から始まっていると、いつも感じています。

【目次】

- p.1 巻頭言：臨床実習(ポリクリ)雑感
- p.2 事務局からのお知らせ、第29回臨床検査専門医認定試験結果、第41回日本臨床検査専門医会総会・講演会のお知らせ、第59回日本臨床検査医学会学術集会における合同シンポジウムのお知らせ、今後の春季大会日程
- p.3 会費納入について、住所変更・所属変更に伴う事務局への通知について、会員の声：品質と信頼性保証の向上に向けて
- p.4 (会員の声)臨床検査と病理・細胞診関連3学会の合同開催の提案、専門医試験を受けて
- p.5 (会員の声)臨床検査専門医試験を終えて
- p.6 編集後記



JACLaP NEWS 編集室 増田 亜希子(編集主幹)
〒113-8655 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学医学部附属病院 検査部内
TEL: 03-3815-5411 内線 37477/Fax: 03-5800-8806
E-mail: amasuda-ky@umin.ac.jp

【事務局からのお知らせ】

《会員動向》

2012年10月29日現在数724名、専門医587名

《新入会員》（敬称略）

湯地晃一郎：東京大学医科学研究所附属病院 内科

《所属・その他変更》（敬称略）

加藤 哲子：旧 山形大学医学部人体病理学 准教授
新 鶴岡市立荘内病院中央検査科 科長

《退会会員》（敬称略）

木下 喜光

【第29回臨床検査専門医認定試験結果】

平成24年8月4日(土)、8月5日(日)に、日本臨床検査医学会主催の第29回臨床検査専門医認定試験が兵庫医科大学でおこなわれ、16名が合格いたしました。合格おめでとうございます。今後のご活躍を期待します。

磯尾 直之、内海 健、太田昭一郎、大塚 弘毅
酒井 佳夫、下山 芳江、末岡栄三朗、手嶋 泰之
長尾 美紀、中村 聡子、西村 邦宏、西村理恵子
長谷川寛雄、古市 賢吾、松下 一之、村瀬 貴幸
(50音順/敬称略)

【第41回日本臨床検査専門医会
総会・講演会のお知らせ】

第59回日本臨床検査医学会学術集会に合わせて、第41回日本臨床検査専門医会総会・講演会が開催されます。多数の会員の参加をお待ちしています。

場 所：国立京都国際会館 2階 第2会場(room A)
日 時：総 会 平成24年11月29日(木)
13時30分から14時10分
講演会 平成24年11月29日(木)
14時10分から15時00分

テーマ：これからの臨床検査を考える
—新しい日臨技と臨床検査振興協議会の歩みと今後—

司 会：小柴 賢洋
(日本臨床検査専門医会 副会長)

演 者：宮島 喜文
(一般社団法人日本臨床衛生検査技師会 会長)
渡辺 清明
(臨床検査振興協議会 理事長)

【第59回日本臨床検査医学会学術集会における
合同シンポジウムのお知らせ】

第59回日本臨床検査医学会学術集会(会期：平成24年11月29日(木)から12月2日(日)、会場：国立京都国際会館)において、日本臨床検査医学会と日本臨床検査専門医会の合同シンポジウムが開催されます。検体部門を中心に検査部門の管理について学びたい若手検査医や臨床検査管理医、病理医の先生方に役に立つシンポジウムを企画しました。管理医必見のシンポジウムです。もちろん専門医にも有用です。早速、明日からの仕事に活かしましょう。多数の会員の参加をお待ちしています。

日本臨床検査専門医会／日本臨床検査医学会
合同シンポジウム

場 所：国立京都国際会館 1階 第4会場(room E)
日 時：平成24年11月30日(金)
16時20分から18時20分

テーマ：検体検査管理加算に相応しい業務とは？
～ここまではやっておきたい臨床検査専門医、臨床検査管理医の仕事～

司 会：木村 聡
(昭和大学横浜市北部病院 臨床病理診断科)
小柴 賢洋
(兵庫医科大学 臨床検査医学)

演 者：土屋 達行
(日本大学医学部臨床検査医学分野駿河台
日本大学病院臨床検査医学科)
米川 修(聖隷浜松病院臨床検査科)
村上 純子(埼玉協同病院臨床検査科)
岡部 英俊(滋賀医科大学臨床検査医学講座)
池田 勝義(熊本大学医学部附属病院
臨床検査部)

【今後の春季大会日程】

平成25年度第23回日本臨床検査専門医会春季大会
大会長 渡邊 卓 教授
(杏林大学病理系専攻 臨床検査医学分野)

開催日時：平成 25 年 6 月 28 日(金)、29 日(土)

開催場所：湯本富士屋ホテル

〒250-0392 神奈川県足柄下郡箱根町湯本 256-1

TEL 0460-85-6111

平成 26 年度第 24 回日本臨床検査専門医会春季大会

大会長 清水 力 准教授

(北海道大学病院検査・輸血部)

開催日時、場所は未定。

【会費納入について】

平成 24 年度の会費振込用紙をお送りしましたのでお振込をお願い致します。尚、未納分のある会員の方々は合計額をお振込ください(納入状況は振込用紙に記載致してあります)。

年会費：1 万円

郵便振り込み口座：00100-3-20509

加入者名：日本臨床検査専門医会事務局

ご自身の振り込み状況が不明な先生は、事務局まで E-mail または FAX でお問い合わせください。

【住所変更・所属変更に伴う事務局への通知について】

住所・所属の変更にもなって JACLaP WIRE など電子メールの連絡や定期刊行物が届かなくなる会員がいます。勤務先、住所および E-mail address 等の変更がありましたら必ず事務局までお知らせ下さい。変更事項はホームページから【会員情報変更届】をダウンロードしてそれに記載し、FAX あるいは E-mail で日本臨床検査専門医会事務局宛てにお送りください。

【会員の声】

品質と信頼性保証の向上に向けて

私は大学卒業後、茅ヶ崎徳洲会病院で、1 年間の 4 つの科(内科、外科、小児科、産婦人科)のローテーション、産婦人科医として 6 年間の勤務後、獨協医科大学越谷病院病理部に 9 年間勤務し、その間、病理部と検査部の森教授の御指導で、病理専門医と臨床検査専門医の認定を受けることができ、8 年前からは札幌の株式会社ジェネティックラボで、主に病理・細胞診断業務に従事しています。病理以外の臨床検査部門の仕事を担当したことはありませんが、会社で QA(品質保証)に携わっており、これまでの当社の品質マネジメントおよび精度管理の試みについて述べたいと思います。

当社は国立大学初の産学共同バイオベンチャーとして 2000 年に設立、2003 年には病理診断事業を開始し、地域医療、難治疾患の新薬開発、医療の基礎研究を支えていくことで『患者さんのため』に貢献することを社会的な役割とし、現在、遺伝子発現などの受託解析、創薬支援やバイオマーカー解析などの先端医療開発、迅速診断やテレパソなどを含む病理学的診断などのサービスを提供しています。

病理診断事業を開始した当初は、検体受領未確認、検体取り違い包埋、検体受領漏れ(未処理返却)、検体枝番号取り違い、薄切拾い間違い、ラベル貼り間違い、依頼書・報告書の名前や属性や病院名の間違い(スキャン)、病理診断・細胞診断結果の誤入力、報告書誤発送など、検体受付～結果報告・発送のいずれの業務プロセスにも不具合(インシデント)が生じました。それらを改善するために、過誤を分析し、ダブルチェック体制の強化などを行い、2005 年には医療機関などに安心して利用していただけるように、「医療関連サービスマーク」の認定を取得しました。そして、基本組織図の作成、各種マニュアルの文書化、必要な記録を残すこと、QMS(品質マネジメントシステム)の構築などを行い、2009 年 12 月には、国際規格である「CAP」(Collage of American Pathologist: 米国病理学会)の認定を取得、2011 年 9 月に認定更新し、品質と信頼性保証の向上に向けて、QMS の適確な運用に努めています。

クレーム(苦情処理)件数の推移は、2005 年 24 件、2006 年 15 件、2007 年 4 件、2008 年 7 件、2009 年 1 件、2010 年 0 件と目に見えて改善があり QMS の構築はできたようですが、QMS の運用管理がうまくいっているかについては、いろいろ問題点があります。それは、「CAP」の認定取得業務が一部の社員で進められたため、積極的に認定取得に取り組む社員、業務命令で仕方なく業務に携わる社員、全く当事者意識のない社員に分かれてしまったようです。しかし、PDCA サイクル(Plan, Do, Check, Act)を有効に機能させて、検査室の質の向上、精確な検査結果の提供、顧客満足度を向上させていくためには、日々のルーチンワークに追われる現状では難しい問題ですが、研修や勉強会などの教育を通して、社員全体を巻き込んで QMS の運用管理に携わっていく以外にないことを私自身も痛感し、2012 年はその開始の年にすべく取り組み始めているところです。

(株式会社ジェネティックラボ 高木 芳武)

臨床検査と病理・細胞診関連3学会の 合同開催の提案

日本専門医制評価・認定機構に加盟する79学会のうち、広告可能な専門医資格は2012年11月現在で55に上り、質の確保と専門医の標準化の整備が進行中です。残念ながら日本臨床検査専門医は専門医数が少ないために広告できない状況なので、専門医の増加は学会の重要課題の一つではないでしょうか？そして、私たち専門医にとって、専門医としての知識や技術を維持するため、すなわち、専門医資格維持のためにはこれらの学会総会に最低1、2年に1回は出席する必要があります。

そこで提案です。現在、日本消化器学会、日本消化器内視鏡学会、日本肝臓学会、日本消化器外科学会といった4つの消化器関連学会がJDDW (Japan Digestive Disease Week, 日本消化器病週間) のように毎年秋に合同開催されていますが、これにならって検査関連の主だった3つの学会、すなわち、日本臨床検査医学会、日本病理学会、日本臨床細胞学会が1年に1回合同で学会を開催することにしているかがでしょうか？例えば、日本臨床病理週間 (Japan Clinical Pathology Week: JCPW) (仮) といったような形で。もちろん、各学会独自の方針があるでしょうから「はい、すぐやりましょう」というわけにはいかないでしょうが、合同開催のメリットについて私見を少し述べてみたいと思います。私のような一般病院に所属する一会員にとっては、年に2回、3つの学会がそれぞれ別の時期に開催されると、平日に何日間も休めないし、旅費の負担も大きいため、学会に出席したくてもできないということがあります。もし、仮に秋の学会だけでも合同で開催されれば、1度に3つの学会に出席でき、勤務上も経済的にも非常に助かります。さらに、対象としている分野が重複している領域も多く、同じ演者による、同じ内容の講演を何回も聞かなくてもいいということもあるかも知れません(もちろん、最重要テーマについては何回も聞く価値がある場合もあると思いますが・・・)。

一方、プログラムの関係上時間帯が重なり、聞きたいと思っているテーマを聴講できないということも起こり得るかと思います。優先テーマについてはうまく調整していただくようにすれば何とかなのではと楽観しています。さらに、多くの参加者が一カ所に同時期に集まることによって、学会の存在が多くの人に知られ、臨床検査医学などに興味をもつ人も現れて、新たな会員が増加することも起こり得るのではないのでしょうか？会員が増えないことには専門医も増えることはありません。又、共通領域をもつ3学会がお互いを補完し合うことによって、学術的にも組織的にも存在感を増し、より充実

していくような気がします。皆さんはどう思われますか？

(広島西医療センター研究検査科 立山 義朗)

専門医試験を受けて

平成23年度に臨床検査専門医会に入会致しました。平成19年に順天堂大学臨床検査医学講座に入局し、昨年(平成23年)、目標であった専門医の資格を取得することができました。

入局後、骨髄像、生化学検査、微生物検査、超音波検査など多岐にわたる研修を行いました。最も大変で記憶に鮮明なのが骨髄像です。

入局前は内科医として勤務していたため、検査データを読むことは日常的なことであり、それなりに仕事もできるだろうと楽観的に考えていました。しかし、骨髄の細胞の説明を受けた後、自分一人で顕微鏡を覗いた時には全く分からず、一瞬にして凍りついたのを覚えています。「大変なところに入局してしまった。仕事をやっていくことができるのだろうか」と、途方にくれました。

骨髄の細胞分類ができなければ診断ができないので、はじめは朝から晩までひたすら細胞の分類をしていました。この時、「顕微鏡で酔う」ことを初めて知りました。また、細胞を見すぎているため、目を閉じても瞼の裏に細胞が焼きついており、常に細胞に追い詰められている日々でした。

1、2ヵ月経ち、顕微鏡酔いや細胞の残像が消えた頃には、細胞の分類ができるようになりました。自分としては非常に達成感があつたのですが、診断はさらに難しいことをその後思い知らされました。骨髄像は非常に奥が深く、現在でも診断に苦慮する例が少なくありません。骨髄像を極めるには、まだまだ時間がかかりそうです。

専門医試験においては、勉強を始めてみると知らないことの多さに驚きました。研修が終了し、臨床検査の全体像が見えた気がしていたのですが、これもまた想像以上に奥が深いということを実感しました。範囲がとにかく広いので、試験勉強は専門医会の講習会の内容を中心に行い、疑問が生じるたびに医局の先生方にご教授頂きました。各分野のスペシャリストの先生方が医局にいらしたことは、本当に幸運でした。

また、技師の方々にも大変お世話になりました。専門医試験の実技試験に備え、グラム染色やクロスマッチなどの練習を行いました。グラム染色では練習の途中から、脱色のしすぎで結果が全てグラム陰性になってしまうという事態に陥り非常に焦りました。技師の方々にエタノールを洗い流すタイミングの見極め方などを伝授し

て頂き、どうにか試験までにスランプを脱出することができました。

実際の試験では、ポイントを絞った勉強だけでは足りない部分が多いことを実感しましたが、多くの方々のご協力を得て無事合格することができました。

今回の試験を通じ、講習会等で他大学の先生方と知り合う機会を持てたのも大変嬉しいことでした。同じ目標を持つ仲間がいるということが、試験勉強のモチベーションにもなりました。また、学会の会場で再会し、近況報告できたことも楽しいことでした。

医局の先生方にはこれまで大変根気強く丁寧にご指導して頂き、深く感謝しております。

臨床検査は大変奥が深く興味深い分野でもあり、また医療の質を維持するために必要不可欠です。少しでも貢献できるよう頑張っていきたいと思います。

(順天堂大学医学部臨床検査医学講座 出居真由美)

臨床検査専門医試験を終えて

去年は不合格でした orz

明らかに勉強不足でした。

暑い夏でした。

慶應の階段教室にはミンミンゼミの音が響いていました。

そして、二年目の今年、ようやく合格しました。

熱い夏となりました。

諸先輩方、初めまして。佐賀大学医学部臨床検査医学講座の太田昭一郎と申します。今年から臨床検査専門医の仲間入りをいたしました。

私、長崎は五島の生まれにして、島原高等学校の出身であります。1993年に旧佐賀医科大学を卒業致しまして、当時、田淵和雄教授の脳神経外科に入局し、2年間の研修を終えた後、同大大学院にて免疫学教室の木本雅夫教授に師事し免疫学を修めました。その後、1998年にカリフォルニア大学サンフランシスコ校(UCSF)脳神経外科に留学し、Mark A. Israel教授の下で脳腫瘍の発生におけるId転写阻害因子の研究を3年半行い、2002年に再度佐賀医科大学に赴任いたしました。現在は、本学分子生命科学講座 出原賢治教授の下でアレルギーの研究を行いながら、末岡榮三朗部長率いる検査部の業務に従事しているところです。

この経歴を御覧になるとお判りのように、私、大学卒業以来、臨床研修以外は専ら基礎研究に取り組んできま

した。現在も出原教授グループの一員として研究は継続していますが、出原教授が当時検査部長兼任であったこともあり、2007年に検査部配属となりました。そこで出原教授に、「検査部付けになったのならば臨床検査専門医を受験しなさい。基礎をやるにしても臨床の専門医を取っておくといいよ。」との勧めを受け、それならばと専門医に挑戦することに相なったのですが、... 私のような臨床経験に乏しいものにはどこから手を付けていいものやらさっぱりわかりません。受験経験者に話を聞こうと思っても、本学には当時臨床検査専門医は出原教授のみで、受験を勧めたその教授も「もう随分昔のことだからなあ...」とあてになりません。たまたまお知り合いになった他大学の専門医の先生から資料を頂けることになったのですが、送られてきたその量といたら膨大なものでありました。目を通してみればまあその範囲のあまりの広さに吃驚です。臨床検査がすべての臨床科で行われることを考えれば当たり前ではありますが、噂に違わず難しい試験で、どうしたものかと考えめぐねている内に早や試験日は迫り、ろくに勉強もできないまま受験したものの、当然の敗退。みなさん山場とおっしゃる免疫・輸血の再試験となりました。

とにかく情報不足でした。臨床検査医学会の中核を担うような、名だたる臨床検査医学講座の先生方とお付き合いがあるわけでもなく、新設医大にまではなかなか情報が入ってきません。周りに受験者もなく、どのような試験なのかが今一つ判然としない中で教科書的な資料ばかり読んでいても、ポイントが定まらず、無駄に広範囲を眺めてしまい、結局は身に付かない、ということでした。何はなくとも情報収集が必要です。そのためには受験者同士のネットワークが欠かせません。

今年は私にとって幸いなことに、同時に受験なさった中の一人の先生が受験生のまとめ役を買って出てください、様々な情報をお送りくださった上に、昨年合格の先生方を講師に招いて勉強会のオーガナイズまでしてくださいました。先生方にはこの場を借りてお礼申し上げます。この勉強会では、受験の体験談をお話くださったので、昨年記憶を甦らせ、心構えをするのに随分役立ちました。また、勉強方法の指導、図書の推薦も頂きました。これから受験なさる先生方も、是非受験者同士のネットワークを作って活発に情報交換なさることをお勧めします。そのためには、臨床検査専門医会主催の教育セミナーに出席することです。このセミナーでは、勉強の重点をどこに置けばよいかわかりますし、受験者の多くが出席しますのでネットワーク作りにはもってこいです。

さて、出原教授のグループではペリオスチンという細

胞外マトリックス分子が研究テーマの一つです。最近われわれは、このペリオスチンがアトピー性皮膚炎発症の一因となることを報告しました。また、ペリオスチンはアレルギー性疾患をはじめとして、線維化を伴う様々な疾患で上昇することがわかっており、近年トピックとなっています。私はペリオスチンに対するモノクローナル抗体を作製して、血中ペリオスチンを測定する検査試薬の開発に携わっており、これはもうすぐ製品化される予定です。基礎研究を業としていると直接臨床に関わることがなかなかできません。このような形で臨床に貢献できることは、基礎研究者としてはもちろん臨床検査医としても望外の喜びです。臨床検査医には、臨床科の専門を持ちながら検査医として活躍していらっしゃる先生方も多いようですが、基礎研究専門の臨床検査医というのもいてもよいのではなかろうかと(都合よく)考えているところです。日頃から様々な実験を行っていますので、検査の方法論についても多少明るいのが利点となるでしょう。今後も基礎研究の側面から臨床検査に貢献できるよう精進していきたいと思っています。

(佐賀大学医学部臨床検査医学講座 太田昭一郎)

【編集後記】

日増しに寒さが加わってまいりました。11月も後半に入り、今年もあとわずかだと実感しております。

今号では、巻頭言を全国幹事の大谷慎一先生にご寄稿いただきました。大谷先生は、私の先々代の JACLaP NEWS 担当編集主幹でいらっしゃいます。「会員の声」にも4名の先生からご寄稿いただいております。ご寄稿いただいた先生方に、心より厚く御礼を申し上げます。

臨床検査専門医試験に合格された先生方、おめでとうございます。私は昨年専門医になったばかりですが、以前合格された先生方の体験談を参考にして、勉強しております。専門医試験の体験談は、今後受験される先生方の参考になるかと存じます。皆様ご多忙とは存じますが、是非とも「会員の声」にご意見をお寄せいただけますと幸いです。

今号では、私が関わっている「院内患者会」について

述べさせていただきたいと思います。東大病院には、「東大病院おしゃべり会『Pharos (パロス)』」という患者会があります。Pharos はラテン語で灯台を意味する単語で、荒波を越える患者さん方の道標になるように、とネーミングされました。2006年から開催され、2か月に1回、血液疾患の患者さんやご家族が集まり、和気あいあいとお話しています。

私は、昨年、前任者の先生から引き継ぎ、医師として関わらせていただいています。しかし、実際にはなかなか顔を出せず、パロスの代表者の方と連絡を取り、院内の会議室の予約を入れるという、いわば事務的作業に終始しています。

先日、久しぶりにパロスに参加しました。先日の会では、白血病やリンパ腫など、様々な血液疾患の患者さん(約10名)がおしゃべりしていました。私は患者さんから様々な質問をいただきました。抗がん剤の副作用、リンパ腫の治療効果判定、可溶性 IL-2 レセプターの解釈について、抗がん剤治療中の飼い猫との接し方、治療中は酒を飲んでもいいのか?など…。「具体的なことは主治医に相談してください」と前置きした上で、一般的な見解を説明しました。

「臨床検査の重要性」について多くの方に知っていただくためには、「検査について知りたい」という意欲のある方に向けて情報を発信することも大事ではないかと思っています。患者会にいらっしゃるような患者さんは、真面目にご自身の病気と向き合っており、病気に関して勉強する意欲を持っています。すぐには難しいですが、患者会の方と連携しながら、臨床検査に興味をもっていただけるような取り組みをしていければ、と考えております。

115号(2012年5月)以降、表紙のイラストのモチーフを変更しています。綺麗なイラストに見えますが、実は、写真をイラスト風に加工したものです。いつか自分で描いたイラストを載せたいのですが…。いつになるやら??

(編集主幹 東京大学医学部附属病院検査部 増田 亜希子)

日本臨床検査専門医会

会 長：佐守友博、副会長：小柴賢洋、木村 聡

常任幹事：

池田 均(情報・出版委員会委員長)、菊池春人(教育研修委員会委員長)、佐藤尚武(保険点数委員会委員長)、下 正宗、

東條尚子(庶務・会計幹事)、米山彰子、渡邊 卓(資格審査・会則改訂委員会委員長)

全国幹事：安東由喜雄、大谷慎一、尾崎由基男、河野誠司、北島 勲、幸村 近、佐藤麻子、清水 力、末広 寛、杉浦哲朗、

諏訪部章、田窪孝行、藤原久美、船渡忠男、松尾収二、松永 彰、三井田孝、宮地勇人、村上純子、盛田俊介

監 事：高橋伯夫、土屋達行

情報・出版委員会：

委員長：池田 均

委 員：安東由喜雄、海渡 健、清水 力、増田亜希子、宮地勇人、盛田俊介

日本臨床検査専門医会事務局

〒101-0027 東京都千代田区神田平河町1番地 第3東ビル908号

TEL・FAX：03-3864-0804 E-mail：senmon-i@jacp.org